

緊急提言：永常発「九州櫛新幹線構想」

—温故知新で地域益・地球益「世界に範たる SHINKANSEN」創り—

高校時代、美術クラブの私は、観光 JAPAN の 2 点セットポスターを制作した。葛飾北斎の赤富士を A1 大で水彩で拡大模写し、その麓部に開通したばかりの新幹線を横一直線に描き入れ、JAPAN と書き込んだ。もう一つは同様に北斎作「波裏富士」麓と一文字に駆ける新幹線の構図であった。40 年前の私にとって、SHINKANSEN は、夢向うの憧憬的存在であった。が、時移り、現実的に我が家のすぐそばを九州新幹線が駆け抜けていくこととなり、私はその開通をその必要性や自然破壊・景観破壊の面などから歓迎する気にはなれない。が竣工間近かで元に戻れない今、何か償いの的なことはないのだろうか……。

九州は日田出身で江戸時代のジャーナリスト的農学者であった大蔵永常は「農家益」という著名で、櫛栽培の利や手引きを著わし続けた。農民への愛情と合理的思考を併わせ持ち「農具便利論」も著作した永常は、畦畔などの空閑地の有効利用による櫛栽培をススメてきた。彼からの温故知新で私は、30 年程前に、その JAPAN WAX TREE (櫛) を九州高速自動車道路法面に植栽し、「用 (櫛実収穫) と景 (郷土景観)」を具現することを提案させて頂き、少し実現してきている。

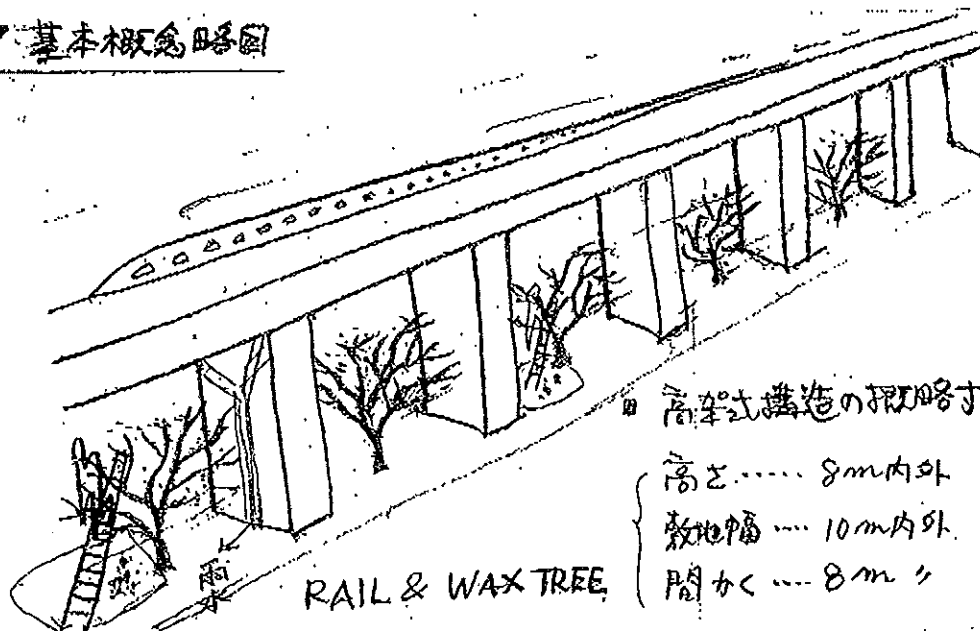
開通間近かの九州新幹線高架軌道を目の前にして、九州高速自動車道路と同様、高架下の空閑地 (適地) を櫛植栽に活用した「九州櫛新幹線構想」を提唱する。このことは二つの意味を担っている。一つは、昔、櫛多き島であった九州に新幹線をそのまま活かして新しく櫛の「植栽・産業・文化・景観」の幹線軸を再創造しようという意味。もう一つは、櫛に連綿と修景されたる世界唯一の鉄道の新創造・グランドデザインということである。

「農家益」から出発して、地域益、そして「環境・文化・教育・平和・人々の幸せ」等を包括した地球益へまで無限に展開できるポテンシャル (下地) を築くことになるはずである。

※ SHINKANSEN (新幹線) ハゼのメリット

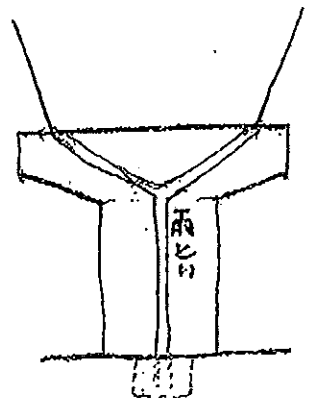
- (1) ハゼの実がたくさんとれる。
しかも、集団なので収穫・集荷しやすい →生産・経済
- (2) 新幹線を修景・魅力化し、
「みどりと紅葉の新幹線」に
人工的・コンクリートのイメージを和らげる。 →景観・アメニティ
- (3) 世界の名物・名所に、観光資源に
将来の文化財作りに →観光
- (4) グリーンベルトで自然環境再生
生物(鳥、昆虫、植物)の棲息環境となる →環境補償
- (5) CO₂削減・脱炭素社会への貢献 →CO₂削減
- (6) 地域に歴史的連続性の付与
江戸—明治—大正—昭和—平成をつなぐ →ふるさと性
- (7) 軌道面雨水の地中浸透は洪水防止に →防災
- (8) 新しい価値の創造
ハゼ下の地面を市民農園にしたりすれば、
コミュニケーションの場にも →市民生活の向上

▼ 基本概念略図



■ 高架式構造の概略寸法

高さ…… 8m内外
敷地幅…… 10m内外
間かく…… 8mク



▼ 水は、雨といかさの
雨水も利用可
(雨水排水の有効活用
の工夫は、洪水防止
にも有効)

<参考例>

九州高速自動車道路法面に
郷土産業・郷土景観の植を植栽して
複合的価値を実現しようとするもの。
(大石提言, 一部実現)

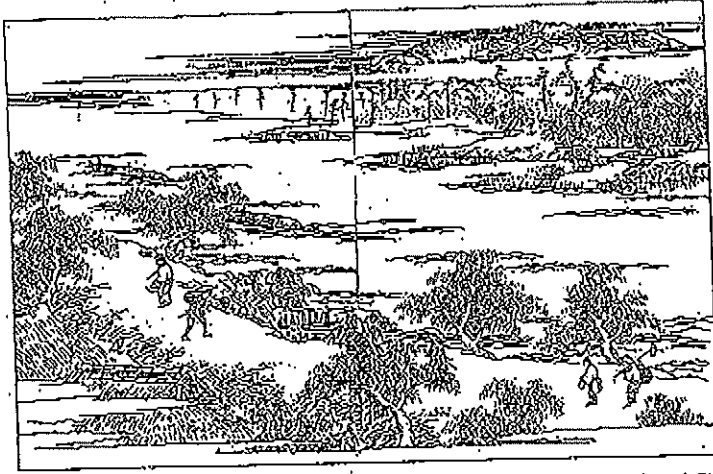


図-1. 大蔵永常審「農家益」に示された空閑地としての道路脇、水路
沿に植栽された植

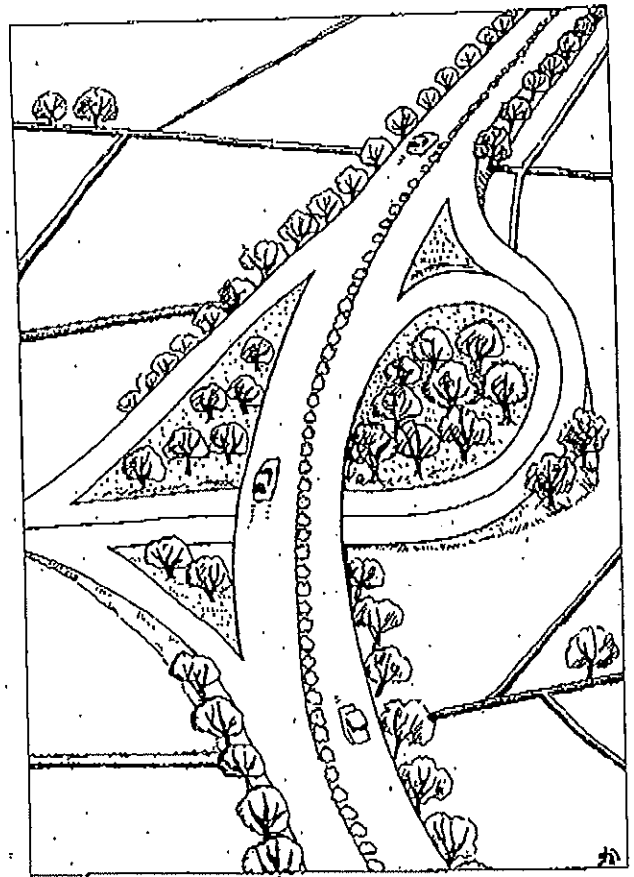


図-5. 八女I.C.付近を想定した九州高速自動車道路の法面
に植を植栽する基本概念図 (1978作図、文献1)

① 伝統的な植の空閑地植栽



写1. 江戸期の畦畔植栽
福岡県久留米市柳坂の植並木の例、福岡県指定文
化財。

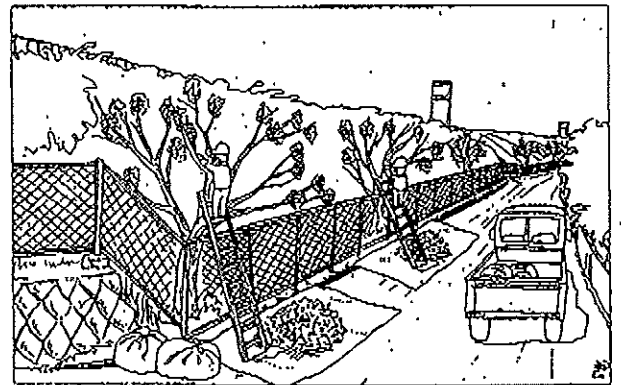


図-6. 八女I.C.付近 (K.P.118.0付近) を想定した九州
高速自動車道路における植による生産的緑化の基本
概念図
(帯状集团的緑化等により収穫集荷容易、1978作図、

九州縦貫高速道路法面植栽構想

本構想は「九州縦貫高速道路を遠々紅々たる
九州縦貫紅植道路に」とでも言うべきもの。そ
れは高速道路の盛土型法面に「用と景」両全的
に植を植え、環境の快適性からは好ましくない
高速道路を「禍転じさせて福となす」式に、
① 修景(郷土景観軸の形成)、② 法面管理、
③ 植実生産 等の面でおおいに役立てようとい
うもの。因みに片側法面に5m毎に200km分栽
植で現在不足分の植実の補充が可能。1976



写4-4. 事例としての久留米市宮の陣付近の事例。

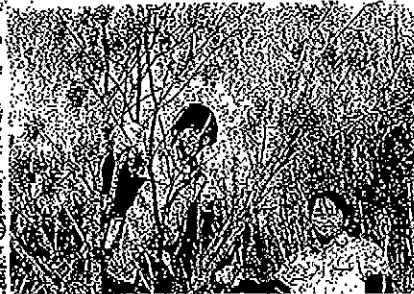


昔の郷土名物ハゼチギリ実習



「昔の道具って、
むつかしい」

第8回織り体験学習が、6月28日、木造資料館「上芳我邸」で開かれました。内子中学校の3年生132名は、ハゼノキの実を砕く仕事や立木式織機による織りなどを体験しました。



平成7年12月10日、西日本短期大学(福岡市)造園科学生が収穫。(写真提供/大石道義さん)

「九州高速自動車道ののり面から
採れたハゼノキの実、使ってね」

ハゼノキの振興に尽力している西日本短期大学造園科の大石道義講師は、九州自動車道路ののり面に、ハゼノキを植栽することを企画して働きかけ、道路公団が8年前に植えました。

昨年12月、造園科の学生さん方が収穫し、その一部の42キロが木造資料館「上芳我邸」の織り体験学習用にと贈られました。

図~8.九州高速自動車道路法面植栽の連関的教育力ポテンシャルの事例

特用樹・生産的緑化研修において、西短大造園科大石ゼミ生が、久留米市宮の陣付近の九高道法面の植より収穫実習(1995.12)した植実を、織り体験学習(1996.6)用の積実不足だった愛媛県内子中学校に送付提供。時と場を違えて偶然の教育的連系であったが、植のもつ教育力を示唆される。(広報誌：内子町提供)

例えば高令者の懐かしさ志向も含めた地域の老若男女こそっての植実収穫(祭り)への参加は、子供たちの郷土学習・体験学習、世代間交流、コミュニティ連帯感醸成等に結実できよう。特に地元農業高校等における実習復活等も考えられる。

左上図は、昭和初期の八女農高における植ちぎり実習。(出典：70周年記念誌、八女農高)左下図は、西短大生による高速自動車道路での実習。



写4-3. 事例としての久留米市宮の陣付近鳥橋JCT近くの冬の状況。
植栽後約13年、2001.2.



写4-5. 事例久留米市宮の陣付近法面植栽の櫃での植実収穫実習(1)
西日本短大造園科大石ゼミ学生、1995.12. 通常的に人の立ち入りや他用途を拒否している法面空間において、時により人が入り風物詩的な産業景観や教育力などが時間限定的に発揮されることとなる。